

照葉樹林だより

綾の森を世界遺産にする会 会報

第4号

2006年7月10日

自然林復元への道

綾の森を世界遺産にする会 会員 坂元 守雄

1990年に発足した「宮崎市の水を考える会」が、宮崎市の飲み水の安全性と大淀川の浄化を課題にしながら活動をすすめるうちに、森の重要性に目を向けるようになったのは、必然的な成り行きと言ってよいでしょう。私も関わっている同会は3年余りの準備活動を経て、96年、「水源の森づくりをすすめる市民の会」を発足させ、大淀川の支川境川上流の国有林1ヘクタールを九州森林管理局から借りて、水源の森モデル林をつくることにしました。翌年3月、支援者やボランティア130人で、イチイガシ、タブノキ、クスノキを1600本、ヤマザクラ、ヤマモミジを400本、計2000本を植樹しました。植樹直後、クスノキはノウサギの食害を受けその半数を失いました。また、イチイガシは活着せずに枯死するのが増えていき、私たちは、植樹した直後から森づくりの難しさを思い知らされました。



またその反面、私たちは、生物としての樹木や森のことを少しずつ学んでいきました。

植樹から1年半後の2回目の草刈りのとき、植樹した土地のあちこちに、いろいろな木の芽が伸びているのに驚かされました。私たちは、その若木も一緒に育てることにしました。2年半後の夏、萌芽したそれらの木は植樹した木より高く伸びていました。3年経ち、4年経って常緑樹の成長が目立つようになり、その陰で落葉樹が枯れていくのを知りました。植樹したヤマザクラやヤマモミジにとっても生育環境は厳しくなってきました。

2000年の7月、植物の先生に植樹地内の植物を調べてもらい、萌芽した樹木では57種を記録しました。その中には、最も数多く萌芽したシイをはじめ、アラカシ、タブノキ、イチイガシ、ホルトノキ、ハナガガシ、ヤブツバキ、カゴノキ、イスノキ、ホソバタブと、照葉樹の高木を構成する樹種がそろって成長していて、私たちはその多さに驚き、そして歓喜しました。今では高さ10メートルほどの樹木が競い合い、多様な林になっています。

この借用地は、前はスギの伐採跡地で、それまでの40～50年間は密生したスギ林だったといえます。今でも周囲はスギ林です。スギ林の跡地になぜこのようにさまざまな樹木が萌芽するのでしょうか。あまり見かけないハナガガシや比較的大きな種子をもつヤブツバキなどはどこからやってきたのでしょうか。今でも不思議に思っています。

私は森の復元に、スギやヒノキ林と同じ手法を踏襲して植樹することに疑問をもつようになりました。樹木や森は、私たちの想像を超える潜在力、回復力、成長力をもっているのではないかと思います。

「綾の照葉樹林プロジェクト」は、事前調査を行ったうえで、植樹せずに自然の力で森を復元する方法を採っています。その土地の潜在植生の萌芽力を生かし、多様性に富む森をつくる最も合理的な方法です。今後、先駆的な森づくりの手法として注目されるようになるものと期待しています。

照葉樹林の保護と復元

東京大学大学院 教授 大澤 雅彦

はじめに

照葉樹林は人が破壊する前は、国土のほぼ半分を覆っていました。現在では 1.6% ですから残存率は 3% 程度です。それ以外の森林は縄文時代以降、人々が農耕地や植林地に変えてきました。人が近寄りたがたい場所を除けば、残っている森林の多くは昔は墓所を取り巻く聖域の森、その後、社寺林などとして残されたものです。聖域とされた土地に森林が残っているのは神社林のほかにも沖縄の御嶽林、中国の風水林をはじめ世界中で見られますが、日本ほど多いところは珍しいでしょう。そこには日本の土着信仰といえる神道の意味が大きいことはよく知られています。1909 年には南方熊楠が神社林の生態学的意味を認めています。時の明治政府が中央集権化を進める過程で、集落ごとの産土神を祀る神社を合祀令によって統合していく方針に自然保護の観点から反対しています。その理由は、古来神域として保護されてきた神社林は、多くの希少生物の生息地、鳥類の生息地、魚付林などとして機能しており生態学的に重要だとしています。鳥類の生息地としての森を失えば、害虫が増え、農耕地に大きなダメージを与えるというように、単にどの種が貴重だから守れというような理由でなく、多くの生物が相互関係をもって成り立っている生態系として森自体を保護する必要があると述べています。ドイツのヘッケルという動物学者が生態学という言葉をつくってから 50 年もたっていない頃に、すでに学問の論理を自然保護へと活かそうとしました。しかも、南方は

その保護のために政府に直接意見を述べたり、奔走したりしたことで知られています(鶴見和子『日本民俗文化大系』1978)。

群落のレッドデータにみる照葉樹林の現状

照葉樹林域は当時すでに人々の生活圏と重なり、かなり失われていました。それから 90 年ほどの後 1996 年に日本自然保護協会と世界自然保護基金が協力して日本の保護上重要な植物群落についてのレッドデータブックをまとめました。群落版レッドデータブックと俗称されていますが、これは通常みられる種のレッドデータに対して、世界的にも最初につくられた群落版のレッドデータブックです。その特徴は、個別の種が希少だから保護するという論拠ではなく、群落としての貴重性、重要性による評価を行い、その生育地を含めた生態系としての保護をめざすものです。もちろんその中には綾の照葉樹林もリストアップされています。

そのデータから照葉樹林の面積分布を調べたのが図 1 です。スダジイ、コジイ、タブノキなど主要な常緑広葉樹林 8 群落タイプ、総数 1058 群落についてみると、もっとも数が多かったのは 1~10 ha の小さな面積クラスで 460 群落ありました。次に多かったのは 0.1~1 ha の 259 群落で、合わせると 10 ha 以下の群落数は 794 群落 (75%) でした。

森林の種多様性は、ほぼその面積に比例します。多くの生物群では、おおよそ面積が 10 分の 1 になると種数は半分、100 分の 1 になると 4 分の 1 となるような関係(種数 - 面積関係のべき乗則)が知られています。また、面積が小さくなると当然構成種の個体数も減りますから、それだけ環境の変動に対して不安定になります。その意味で、保護区の面積は大きいほど、より多くの種を安定的に守ることが出来ます。最近、各地で設定されるようになった生態学的回廊(コリドー)は、個別の保護区を相互に結ぶ移動路で、一つ一つの保護区の面積は小さくても、相互に生物が行き来することによって遺伝的な交流も可能となり、結果的に大きな保護区を作ったのと似た機能を果たすことが出来るものです。

小面積になってしまった照葉樹林はどのような土地利用に囲まれているのかをみたのが図 2 です。最も多いのは二次林(29.4%)、次いで植林(18.9%)ですが三番目が水田(15.8%)、四番目に市街地・集落(10.5%)となつて、照葉樹林がわれわれのご

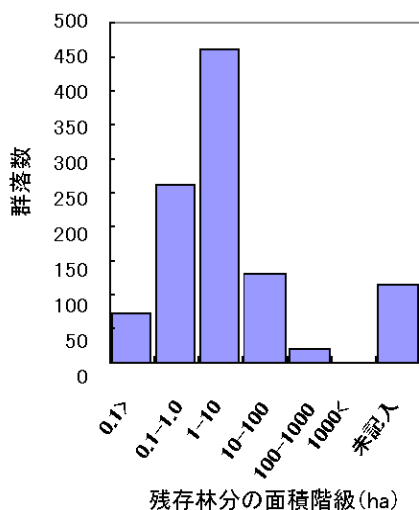


図 1 日本の重要な照葉樹林の面積階級別頻度分布 (群落版レッドデータブックのデータから描く)

く身近にある森林だと言うことがよくわかります。個別の群落でみると、とくに低地に発達するタブノキ林などは市街地・集落に隣接することが最も多くなっています。

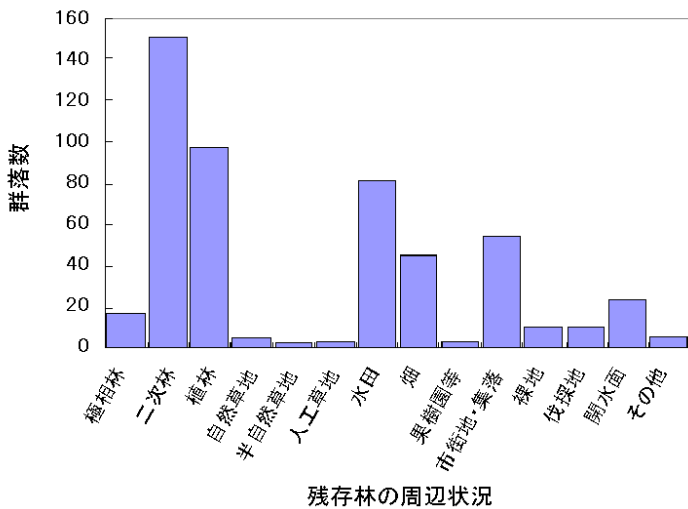


図2 照葉樹林をとりまく土地利用型の頻度分布

学術上貴重な照葉樹林はほとんどが 10ha 以下の面積しかない小規模な森林で、しかも人間の生活域に取り囲まれ、もはや広げることは不可能です。こうしてみると、綾の 2000ha ともいわれる照葉樹林がいかに貴重なものかわかり頂けます。

綾の森の保護がなぜ重要か

しかし、世界遺産の森は、良好な森林が 5000ha 以上は残っていることが必要だと言われています。その程度の面積があれば固有の生態系としてのまとまりが子孫の代まで維持出来るだろう、というのが根拠です。今年 3 月に、生物多様性条約第 8 回締約国会議の開催に合わせて、グリーンピース・ジャパンという国際自然保護団体が、世界で手付かずの森林が 50000ha 以上広がっている地域を「手付かずの森林地域」として発表しました。日本では 4 ケ所が選ばれましたが、北海道や東北などブナ林地帯のみで、残念ながら照葉樹林の領域では候補はありませんでした。将来的にもこの候補になりえる照葉樹林は、日本ではもはや綾の森と周辺しかないでしょう。

そこで、現在残っている部分を中心に照葉樹林の面積を広げて、本来照葉樹林に出現する生物相を確保し、世界でここにしか残っていない熱帯林につづく豊かな森として保護して行こうというのがこの「綾の照葉樹林プロジェクト」です。前回ご紹介した世界遺産に指定されているカナリア諸島の照葉樹林では常緑広葉樹はわずか 10 数種です。

アフリカの西でかろうじて生き残った遺存型照葉樹林と、現在でも盛んに熱帯からの種の流入の可能性をもっている日本の照葉樹林との大きな違いです。

綾方式は再生ではなく復元

「綾の照葉樹林プロジェクト」では、当初から復元という言葉を用いています。自然再生推進法という法律が平成 15 年に施行されましたが、そこで使われている再生という用語は使っていません。この用語の違いは以下のような理由にもとづいています。

再生 (regeneration) というのは、生物の実験でよくやるトカゲの尻尾の再生が良い例です。生物個体はその部分がある程度は再生する能力をもっています。しかし、植生や生態系となると、トカゲのように遺伝的にプログラムされているわけではないので、同じものは再生しません。ですから本来は、自然林は手を加えず保護するのが一番です。自然林には、歴史的過去に分布してきて、一度失われたら再度分布する可能性が全くない植物も沢山あります。ある地域に固有の自然が簡単に再生してくるのであれば、壊してしまってもさほど問題はないでしょうが、現在の環境によって規定されるだけでなく歴史的存在でもある自然生態系の再生はできません。だから私たちはわずか 3% しか残っていない照葉樹原生林は一時的な社会経済情勢などで破壊してしまわず守らねばならないのです。その意味で、上述した聖域のような特定の場所は、人々が手を加えない場所として確保してきた点に意味があります。聖域が生物多様性保護にとって果たす役割が国際的にも注目されており、ユネスコや日本に本部がある国連大学などが主催して毎年のように世界のどこかでシンポジウムが開かれています。

さて、もう一つは綾方式でいうところの復元 (restoration) です。復元とは、かつてあったものをもとに戻そうという人間の営みをさします。たとえば壊れてしまった土器を復元するというのがわかりやすいかもしれません。それは元と同じものを作り出す再生とは違います。自然は、復元は出来ても再生は出来ないという意識をもつことが重要です。再生できない原生自然は破壊しないのが大原則です。われわれが取り得る手段は人工林から照葉樹林への復元です。どのようなものが復元されるかは、復元のやり方に依存することになります。人工林といえども森林として一定の機能を果たしています。それを失わないように上手に照葉樹林を復元することが求められています。

(日本自然保護協会専務理事)

「てるはの森の会」事務局から

「綾の照葉樹林プロジェクト」の動き

～普及・啓発活動～

■ 平成 18 年度「森林（もり）の市」で綾プロジェクトを紹介しました！

（2006 年 4 月 29 日～30 日@東京・日比谷公園）
林野庁の主催するイベント「森林（もり）の市」に当プロジェクトも出展し、都内に住む多くの人々に「綾プロジェクト」を宣伝してまいりました。ビデオ映像の放映、リーフレットの配布、そして「照葉樹林クイズ」といった誰でも参加できるクイズを実施しました。



照葉樹林クイズに参加する人々

■ 「照葉樹林文化シンポジウム 2006」開催

（2006 年 5 月 13 日～14 日@綾・照葉大吊橋周辺サイクリング・ターミナルほか）

新緑の季節の恒例行事となりました「照葉樹林文化シンポジウム」を 5 月に開催しました。今回のメイン講師は“スローライフ”の提唱者である明治学院大学教授の辻信一氏と、ノンフィクション作家の島村菜津氏。今回のテーマは「森から学ぶスローライフ」。講演会だけでなく、実際に照葉樹林の食文化を楽しんだり、ライフスタイルを見直すきっかけを提供しました。



遊歩道の整備

また照葉樹林ガイドボランティアが、このイベントで正式にデビュー。ガイドの案内により照葉大吊橋遊歩道を散策した後、大雨で崩れた遊歩道の修復ボランティア作業を実施しました。

～報告会の開催～

■ 綾の沢調査報告会（2006 年 6 月 17 日）

平成 17 年度に実施した「綾の沢調査」の成果報告会を実施しました。照葉樹の森と針葉樹の森の沢での流量や、水生生物の生息状況を計測したデータを基に調査の進捗状況と中間結果の報告を行いました。なお、この調査は本年度も継続して実施いたします。

♪お知らせ♪

●「照葉樹林ガイドボランティア養成講座」開催
今年も綾を中心に照葉樹林のガイドボランティア養成講座を秋に開催する予定です。詳細が決まり次第ご案内を差し上げます。多くの方々のご参加をお待ちしております！

会員募集中！

「てるはの森の会」では、綾の照葉樹林プロジェクトにご協力いただける会員を募集しております。

年会費	個人サポート会員	2000 円
	家族サポート会員	3000 円
	団体サポート会員	5000 円
	法人サポート会員	10000 円

会員になっていただくと、照葉樹林やプロジェクトに関する情報を掲載した「照葉樹林だより」を年 4 回お届けします。プロジェクトが実施するイベントや各種行事に参加できます。詳細は下記事務局までお気軽にお問合せください。

綾の森を世界遺産にする会 会報
第 4 号 2006 年 7 月 10 日
発行：綾の森を世界遺産にする会
事務局：てるはの森の会
〒880-0014 宮崎県宮崎市鶴島 2 丁目 9-6 みやざき
NPO ハウス 403 号
TEL 0985-35-7288 / FAX0985-35-7289
E-mail: teruha@miyazaki-catv.ne.jp
URL: <http://www.teruhanomori.com>

（表紙の写真「初夏の綾南川」 撮影 坂元守雄）